

# 人生を拓く

⑧

佐藤 忠士さん (84) 32区

美津子さん (83)

忠士さんは入植3代目。9人兄弟の長男として農家を継ぎ、町の稲作発展とともに歩んできました。

1936(昭和11)年、両親はこの地で農家として自立するまで、小作として苦勞の連続だったそうです。

「土地は粘土質で、大つきな石も多かった」。粘土客土などの土壌改良を粘り強く重ね、美田に育てました。

凶作だった1956(昭和31)年の記憶が強く残っています。「息子が生まれた年で、よいよなかつたなあ。3俵取れんかった。前の年もひどかった。米専業だったから、収穫が終わってからもっこ担いで夫婦で働きに出たよ。年寄りがおつたからね、子どもの世話を任せてな。このあたりはみんなそうだった」。

1973(同48)年、160枚くらいあった水田を再編し、1枚30坪、水張り3・2畝に整備しました。作業効率が上がり、そのころから暮らしも安定してきたようです。



「若い時は18貫から20貫(66〜74キログラム)、背丈も5尺4寸(約162センチメートル)くらいあった。大きい方だったんで大会でよく相撲取ったもんだ」。恵まれた体格でよく働きました。「良い年で10俵いったこともあったなあ」と40歳ごろには豊穡の秋を実感できる米づくりをできるようになっていました。

美津子さんは、美瑛町俵真布育ち。10人兄弟姉妹の9番目で、24歳で忠士さんと見合い結婚。3人の子宝に恵まれました。農閑期には土木作業の出稼ぎもいとわず一家を支え続けた日々。年々歳々訪れた穏やかな今は、夏の野菜作り、そしてにぎやかに集まってくる子どもたち家族、内孫7人、ひ孫5人の成長が楽しみです。

自家用の野菜づくりは、友達、知人に配って「おいしい」と聞くのが何よりの張り合い。その野菜で毎年漬ける白菜漬、茄子漬、沢漬、なまくら漬、と手間を惜しみません。「量少なくなつたよ」と言いながら、楽しみに待っているたくさんの笑顔が冬支度への励みです。

## 俳句

年賀状添えの一筆あた々かし  
初鏡見て見ぬふりのシワの数  
福袋大きい方をえらびけり  
鈴つけて正月買出し馬と行く  
御降りや黒竹生えし父母の墓  
新年は掃除の日々が連れてくる  
餌台に盛って鳥待つ三が日  
三ヶ日パスポートいらぬ世界旅  
越中が伊予に振舞う雑煮かな  
旭岳きりりと在りて初あかり  
神域は雪のみ音なく色もなく  
今日だけは耳に愛しき初雀  
若水汲む幾度目かとは数えずに  
おかげさまおかげさまでと初日の出  
新年会こぶし回して十八番歌  
福よ来い少し大きめしめ飾り  
リハビリや机上に遊ぶ独楽二つ  
古代文字めくメールでの年賀状  
百歳を晩年とせり初詣



杉山 ひろのり  
保科 なほ  
徳光 吐苦  
杉山 りつ  
山口 佐知子  
横田 則子  
若田 久  
高瀬 潤  
石澤 清宏  
澤田 久美子  
松山 蓉子  
三島 智  
若田 郁  
本田 咲  
佐々木 りえ  
山内 みゆ  
長谷川 きみゑ  
小林 ろば  
高橋 公花